

Title	魯迅雑文中のロマン・ロラン
Sub Title	Romain Rolland vu par Lou Sioun
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.299- 311
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0299">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0299</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 魯迅雜文中のロマン・ロラン

佐藤一郎

### 一、

山本健吉氏は、岩波の『魯迅選集』別巻の『魯迅案内』で、次のようにいっている。

「雑文・雑感のなかで、彼の行動家・批評家・啓蒙家としての面はもっとも鋭く表現されているのであって、その点では、同じ時代の周作人や林語堂などの小品文の銷閑的な性格と、きわだった対照を示している。私は、漢文・唐詩・宋詞・元曲といった言い方で、民国になってからの新文学の代表的なものを挙げるとすれば、雑文・雑感・小品文などの名称で呼ばれるエッセイ文学ではないかと思っている。」

中国伝統文学の中樞をなすものは、詩文であった。詩文のみが価値があるとされ、小説戯曲はそれよりはるかに劣るものであるという意識が二十世紀のはじめまでつづいてきた中国で、文学革命がおこったからといって、この伝統がそう簡単に消滅するものではない。冒頭にかかげた山本氏の意見は、文学革命以降の中国文学の歴史を、ともすれば小説中心にたどって満足しがちな日本の知識人の

既成觀念に対する挑戦である。それもいわずゆる中国文学者ではなく、文芸評論家の側からする現代中国文学の重大な性格指摘として注目したい。

この雑文は中国文学の歴史から見ると、豊富な議論文の表現系列につながることは間違いないが、先秦の諸子百家の発想よりは魏晉の作者に、近くは梁啓超よりも章炳麟に親近感を抱いたであろうことも、容易に推測できる。政治と知識人との間の緊張関係がより多く類似しており、その結果、文学革命前後から日中戦争前夜までの中国において、反体制的な言論活動を継続するうえで、かれらに学ぶところもより多かつたであろうと思われるからである。正攻法ではなく、しかも効果的な、多様な戦闘様式が必要であった。七首のような表現も必要ならば、塹壕のなかにたてこもって被害を最少限度に食止めながら、敵將を狙撃することも必要であった。それ故に魯迅の雑文は、中国の正統的な文章家に直接つながるものではなく、やや異端的な人びとの表現に近い。それは当然ながら、政治批判の文学の系列につながる。

また、文人としての側面を持ち、文人としての趣味性をはるかに超えている。

その点でも直接正統派につながるものではないが、モラリストである一点において、正統派の求道精神にも通ずるように思われる。この特異な議論文の作者は、どのような芸術方法を身につけていたか。以下しばらく川上久寿氏の『魯迅研究』（くろしお出版）の整理を活用しながら、次第に本論に入ることにした。川上氏は「多様な表現方法から雑文がいかに優れた戦闘芸術であるか具体的に」分析して、次の八ヶ条を立てている。

- 一、物語に託する方法。
- 二、古人古事に託して現在の人や事件を記述する方法。
- 三、日常の平凡事を記述しながら議論を展開する方法。
- 四、私事を記述しながら議論を發する方法。
- 五、譬喩による方法。

六、反語逆説による方法。

七、隠蔽による方法。

八、簡勁晦渋な表現によって。

それぞれの時と場合によって、もっとも適切な表現が選択されたのである。それは戦闘手段としても有効な方法であるし、芸術としても内容を豊かにする方向に働く。論敵の意表を突くことも可能であれば、検閲の目をごまかすことも不可能ではない。さらには読者に、変幻自在な文章を読むたのしみをもたえるのである。

たとえ竹内好氏の「魯迅をよみたがる青年諸君は、……どうも私には、かれらが不幸であるような気がしてならない。そして、幸福になるよりも、知ることのなぐさめをやはり生きる意味と考えているような気がしてならない。」（『魯迅入門』東洋書館）という見解が原則的に正しいとしても、そこにはやはり読者の予想もしていないような間道とか迷路とか山道を指示して見事に切り抜けて見せた案内人と共にある喜び、そのような文章を読む喜びをも伴なうことは否定できない。

この喜びは、いったいどこから来るのであろうか。わたくしにはどうも、中国古来のすぐれた文章作家が身につけていたものと、無関係ではないように思われる。これはやはり、かれの文章自体の持味とでもいうものの、一要素ではなからうか。

## 二、

川上久寿氏の挙げた八項目は、はたして魯迅の独創であろうか。そうではない。これらはいずれも、「古より已に之れ有り。」であって、ただその組合せかたや、ひねりかたが特異なだけである。そして、取りあげる素材が新鮮になっていただけである。しかしこの文章の伝統をふまえて、切迫した強さ、たしかなイメージを構成して見せたのは、魯迅の功績であるに違いない。

では具体的に、魯迅がかれの周辺にいる人に対してその雑文中において、どのように取扱い、どのように表現しているか調べてみよう。その一人としてここではとくに、その生き方において共通した要素を多分に持っているロマン・ロランに対する態度を検討するこ

とにする。

この二人の生き方、文学の質に共通のものはあることは、日本における魯迅とロマン・ロランの研究者と愛読者のグループを見ただけでも、かなりよく分る。前者には「魯迅友の会」と「魯迅研究会」があつて、それぞれ機関誌活動と研究活動を行なっているが、後者には「ロマン・ロラン協会」があつて、やはり同様の活動を行なっている。その機関誌『ロマン・ロラン研究』は、第五十九号（昭和三十七年四月発行）を特集、「魯迅とロマン・ロラン」にあてたが、同号の後書で「この種の小誌は殆どすべて廃刊となつた今日、よくもこの研究誌が続刊されていると不思議がる人も多い。これは全国のかくれだ支持者の力によるものである。」と述べている通り、少数ではあるが熱心な支持者がこの二人の作家にはついているものと思われる。

そしていづれも、いわゆる文学青年の範囲を超えた層に支持者を持つてのが特色である。かれらは魯迅とロマン・ロランを、一人の文学者としてだけ支持しているのだとは思われない。むしろ生きる上での心の支え、この敗戦後の混乱のなかで、現在の安定ムードのなかで、流れに抗して生きようとする姿勢がそこにはある。ただし、政治的であるより、より多く人間的であろうとし、一個人の邂逅の問題で終らせまいという決意のようなのが感ぜられる。

### 三、

ロマン・ロランの研究者である蛭川謙氏は、先にあげた特集号に「魯迅とロマン・ロランの問題点」と題する一文を書き、そのなかで次のように述べている。

「まず二人の作家の同一性を注目しよう。ホーマー、シェイクスピア、ゲーテといった世界文学という範疇に入りうる数少ない作家の系譜をたどると、われわれの身近ではトルストイを中にはさんで、ロマン・ロランと魯迅の姿が素直に浮かぶであろう。

今日、「フランスにロマン・ロランあり、中国に魯迅あり、インドにタゴールあり、そして日本には誰があるのか？」（堀田善衛『インドで考えたこと』岩波新書）と合言葉のように言われるわけもなづけるであろう。」

では一步を進めて魯迅とロマン・ロランの間に現実に交友関係、影響関係が存在したかという点、お互いある程度の共感を表明はしているが、特別に密切な関係があったとはいきれないのである。それでもロマン・ロランにはその本質に「この考え方、この感じ方そのものに、東方的なものへのロランの理解の広さ、透徹力の深さ、あるいは自然さ」があり、「一般にいつて、西洋的なものと対立する東洋的なものについて、自ら或る種の抵抗を感じることもなく、むしろ一つの共感や、歎びや、一致を覚えるヨーロッパ人の一人」であり、「それは単に彼の知性の明敏さによるものではなく、むしろ、彼の精神が内面的、本質的にいつて、狭義の西洋的なものよりも、広義の東洋的・否むしろ普遍的、世界的なものに、いつそう親近性を有する」（宮本正清『ロマン・ロラン思想と芸術』みすず書房）ためであらうか。魯迅の『阿Q正伝』が仏訳されると、ただちに感激的な批評を魯迅に送っている。ただしこの手紙は、直接魯迅の手に届く前に失なわれてしまったが、その内容は『阿Q正伝』の仏訳者敬隠漁から聞いて魯迅も承知していた。小野忍氏の「外国における魯迅」（『魯迅案内』所収岩波書店）では、「魯迅自身も友人の許寿裳に語った話のなかで、ロマン・ロランの『阿Q正伝』評に言及している。「ロマン・ローランが敬隠漁の仏訳した『阿Q正伝』を読んで、こう言ったそうだ。「この諷刺的な写実小説は世界的なものだ。フランス大革命の時に阿Qはいた。わたしは阿Qの苦しそうな顔を永久に忘れることができない。」と、この事実を記録している。

ところが、この種の魯迅の言葉は、その全集や訳文集を調べてみても、決して多く出てくるわけではない。

逆に魯迅はロマン・ロランをどう見ていたのだろうか。「魯迅がロランをどう見ていたかということにふれたいが、この点に関しては、ほとんど資料は皆無である。すでに一九二六年、彼が主宰していた雑誌『蕪原』はロマン・ロラン特集号を発行し、彼自身も中沢臨川、生田長江の「ロマン・ロランの真勇主義」と題する論文をそれに訳載しているが、他には彼がロランの作品をどの位読んだかも不明である。彼は自分の買った本を日記の後に「書帳」として克明に記録しているが、ざっと見た限りでは、一冊も見つからなかった。恐らく余り読んでいなかったというのが事実に近いだろう。またロマン・ロランを直接に論じた文章もほとんどない」

『魯迅とその文学と革命』（平凡社）の著者丸山昇氏は、先にあげた特集号に「現代中国におけるロマン・ロラン」と題する論文

を掲げているが、それからの引用である。筆者も『魯迅日記』の「書帳」を点検してみたが、なるほどロマン・ロランに直接関連を持つ書物は見当たらない。

購入受贈した仏文学関係の書名として出てくるのは、『タイース』一冊、『現代仏国文芸叢書』六冊、『仏蘭西文学史序説』一冊、『フイリップ短篇』一冊、『アポリネール詩抄』一冊、『近代仏蘭西詩集』一冊、『巴黎の憂鬱』一冊、『The Best French Short Stories』二冊、『Petits Poèmes en Prose』一冊、『Vigny 詩集』一冊、『Valéry 致友人書』一冊、『Les Idylles de Gessner』一冊、『Le Jaloux Garzalis』一冊、『オルフェ』一冊、『Le Bestiaire』一冊、『ボオドレル研究』一冊、『Les Fleurs du Mal』一冊、『フイリップ全集』二冊、『S. Sauvages』一冊、『現代のフランス文学』一冊、『詩と詩論』二冊、『コクトオ芸術論』一冊、『新フランス文学』一冊、『仏蘭西新作家集』一冊、『ジイド以後』一冊、『ジイド文芸評論』一冊、『にんじん』一冊、『新興仏蘭西文学』一冊、『ジイド全集』一冊、『モリエール全集』一冊、『ジイド研究』一冊、『モンテーニュ随想録』一冊、『フロオベール全集』一冊、『王道』一冊などであって、まったくロマン・ロランの作品を欠いているのである。なお、抄出の順序は魯迅の日記に現れる年代順であり、全集本の場合は初出のものだけを探った。同一書を二冊以上購入しているのは、必要と思われる人に贈る習慣があったからである。漢字仮名まじり文の題名は、もちろん日本で翻訳された作品や研究書である。

そもそも、魯迅がもつとも得意とした外国語は、日本語とドイツ語であった。英語とフランス語の書物も読めることは読めたのかも知れないが、魯迅が関心を寄せたスラブ系文学の翻訳も、日本語とドイツ語からの重訳であった。

蜷川讓氏は、「魯迅とロマン・ロランの問題点」の結びでこういつている。

「しかし魯迅はその解決の灯を西欧には求めなかった。彼が好んだ西洋の文学は、東欧、北欧、バルカン諸国などの弱小民族の文学であり、とくにゴッゴリ、アンドレエフ、ガルシン、ペトフィ、シェンキウィッチなどを愛読し、ニーチェを好んだ。ラテン系の文学にはほとんど無関心であったと伝えられる。だがラテン系といっても、ロマン・ロランだけは例外で、親近性があつのではないだろうか。」として、「魯迅が編集発行した『莽原』誌にロマン・ロラン特集号が選ばれたことはこのことを裏付けるであらうか。」と理由づけしてい

るが、その「ほとんど無関心であったラテン系の文学」にも、今あげた程度の知識は持っていたのである。

ただし『魯迅訳文集』十巻のうち、フランス文学関係で翻訳している作品は、わずかにジュール・ベルヌの『月界旅行』と『地底旅行』だけで、それもジュール・ベルヌをアメリカ人と誤認しているくらいであるから、作品の題材に興味を示したと見るべきであり、正確に言えば、一種の翻案ものである。

かれのフランス文学関係の読書は、論争のなかで進められたもので、魯迅は論争の必要から読書をする傾向をもったが、なぜロマン・ロランの名前が「親近性」をもっていたのにもかかわらず出てこないであろうか。

しかも、たとえフランス語で読むのは骨がおれるとしても、日本語とドイツ語でロマン・ロランを読むのに、なんの苦勞もいらなかったはずである。一例をあげれば、『文学』（一九六六年八月号、岩波書店）の井口一男氏の論文「日本におけるロマン・ロラン」大正期をめぐって」は、大正六年一月から七年三月にかけて、いちはやく『ジャン・クリストフ』の完訳が後藤末雄氏の手でなされたことを伝えているし、豊島与志雄の名訳の世に出たのも大正九年であって、その気さえあれば手に入れるのに、とくに困難があったとは思われない。また魯迅・本名でいえば周樹人と周作人の兄弟は、白樺派文学運動の、ことに武者小路実篤のファンであったから、『白樺』誌上に十種発表されたロマン・ロランについての紹介を、まったく見過してしまっただとも思えない。

では中国におけるロマン・ロランの翻訳は、はたしてどの程度なされたのであろうか。阿英の編集した『中国新文学大系』翻訳総目（一九三六年）には、わずかに羅曼・羅蘭「貝多汶伝」が楊晦訳、北新版として見えるだけで、莫泊桑と法郎士、それに都徳が目だつぐらいのものである。一方、モーリス・デコルト著渡辺淳訳の『ロマン・ロラン』（理論社）によれば、「世界中に翻訳され、流布されていないロマン・ロランの作品はほとんどない。……中国は伝記と『ジャン・クリストフ』をそれぞれ出版している。」と述べているが、発行年は明記していない。鄭清茂氏の證言によれば、この『ジャン・クリストフ』の中国訳は一時期たいへん青年たちの間で流行したことがあるそうである。そこで、これから先は推測になるが、魯迅のロマン・ロランについての知識は、各種の文学史や雑誌や新聞からの知識と、魯迅の周辺にいた外国文学者や作家たちから得たものが主となっていたのではなからうか。魯迅はたしかにロマン・



ロランについてある程度の知識を持ち、ある種の判断を下している。魯迅はたとえ熟読しない場合でも、敵と味方とを見分ける鋭い勘を備えていた。これは魯迅の社会主義理論に対する態度にも、はっきり表われている。根本的な古典的な理論書ではなく、すぐれた解説書を手がかりに、ものごとの本質を正しく執っているからである。

これでもまだロマン・ロランをほとんど読まなかった理由の説明にはならない。そこでわたくしは思うのであるが、二十世紀の大家であるロマン・ロランやトーマス・マンを、意識的に敬遠したところもあるのではなからうか。十九世紀までの大作家の全集は手にしても、同時代を生きる二十世紀の大小説の作家には、作家としてのある距離感を抱いていたのではなからうか。

それは生き方として親近感を抱いていようといなからうと、本質的に短編作家であり批評的な雑文家である魯迅が、同時代の大河小説の作家に感ずる距離なのである。

#### 四、

魯迅はかれの雑文のなかで、その生涯に八度ロマン・ロランについて言及し、一度手紙のなかで触れている。ここではそのすべての文章を引用してその意味を検討し、川上久寿氏の分類ではどの個条に当るか考えてみたい。けっして多いとはいえないかも知れないが、無視してすますほど少なくとも頻度で出てくるのである。

最初に魯迅が取り上げているのは評論集『墳』所収の「論照相之類」(一九二四、十一、十二)においてである。以下、岩波版『魯迅選集』に翻訳されている文章は、同選集からの引用である。「写真のあれこれについて」(岩波版)で魯迅が論じているのは、写真館の表に掛けてある写真のことなのだが、「まず、その人の羽振りがよいと、その写真は引伸ばされ、その人が「下野」すると、その写真は姿を消す。……もしも、白昼に提灯をつけて、北京の城内に、こういうお偉ら方のように引伸したり縮めたり、掛けたりはずしたりされない写真を探すとすれば、浅学の小生が知るかぎりでは、実に梅蘭芳メイランファン君ただ一人あるのみである。……ただこの「芸術家」の芸術だけが、中国においては永遠なのである。

外国の名優や美人の写真は、私はそう沢山見ていない。男が女に扮して撮った写真は見たことがない。ほかに名士の写真は数十枚見ている。……ロマン・ローランはなんだか妖気を帯びているし、ゴリキキになると、全くゴロツキのようである。どの顔にも、悲哀と苦悶の跡が見られるとはいえようが、要するに天女ほど「好」(芝居で喝采する言葉)でないことは明々白々だ。」

要するにロマン・ローランは中国の政状と文化に対する文明批評の引合いに動員されたのであるが、ここで名前のあがっている外国人は、それぞれ魯迅にとつて相当の関心のあった人たちである。すなわち、トルストイ、イブセン、ロダン、ニーチェ、ショーペンハウエル、ゴリキキと並んで、ロマン・ローランの名前が出てくるのである。川上久寿氏の分類では六の、「反語逆説による方法」に入ろうか。

次の例は『華蓋集統編』所収の「花なきバラ」(一九二六、二、二七)、「死場所」(同年、三、二五)、「花なきバラの三」(同年五、六)である。まず「花なきバラ」と「死場所」を岩波版で掲げると、「フランスのロマン・ローラン先生は今年、満六十歳になった。

『晨报』社はそれで人々に文章を書かせたが徐志摩先生は彼を紹介した後、感慨をのべていった、「……だがもし誰かが近ごろ流行の打倒帝国主義だの何だのというスローガンとか、あるいは分裂と猜疑の現象をもち出して、ローラン先生に報告し、これが新中国です、といったとしたら、彼がどんな感想をもつか、私にはもう予想もできないのである。」(『晨报』附録版二一九九)

彼は遠いところに住んでいるし、われわれは簡単に問いたですわけにも行かないが、「詩哲」(徐志摩をさす皮肉)の目からみると、ローラン先生の意見は、新中国は帝国主義を歓迎すべしというのであるらしい。」

徐志摩は文壇の芸術派を代表する詩人であるが、その徐志摩の見解に魯迅が同調するはずがない。この個所も川上氏の分類では六に入ろうか。

だが、この徐志摩とのやりとりは、魯迅にロマン・ローランの作品を知らしめる契機をもたらした。魯迅はつねに論争のなかで論敵から食欲に学んでいるが、ここでもその例外ではなかったことがその直後に示されているのである。すなわち、段祺瑞政府が一般市民と学生の請願運動を武力弾圧し、「純潔な青年たちが不幸にしてそれに落ちこんで、死傷三百余人に達した」(「傷ましさと可笑しさ」)三

月十八日の惨殺事件の直後に、魯迅は「死場所」を書いている。中国の死場所が極めて広大であると、まず伏線を引いておいてから、それに続けて、

「今ちょうどロマン・ローランの *Le Jeu de L'Amour et de La Mort* (『愛と死の戯れ』) が私の目の前にある。その中にこういつている、

——カルノーは人類が進歩するなら、少しばかりの汚点があってもいい、万やむを得ないなら、少しは罪悪が行われてもいいと主張した、しかし彼らはどうしてもクルルヴォアジェを殺したくなかった、なぜなら共和国は彼の死骸をその腕に抱えることを喜ばなかったから、それはあまり重すぎるので。

死骸の重さを感じることができて、抱えることを欲しない民族にとつては先烈の「死」は後人の「生」の唯一の靈薬である、だがもう重さを感じ得なくなつた民族では、むしろそれは、押しつぶされて一しよに滅び失せるものに外ならぬ。」

なんとこの適切で深刻な意味を持つ引用であろうか。『愛と死との戯れ』は、山口三夫氏の『歴史のなかのロマン・ローラン』(勁草書房)の年譜によれば、一九二四年に書かれて二五年に発表された、フランス革命劇をとりあげた作品のうち、もっとも成功した戯曲である。発表が二五年ならば、魯迅は最新の作品を活用していることになる。モーリス・デコト著、渡辺淳訳の『ロマン・ローラン』(理論社)では、アルバン・ミシェル社一九二六年とあるから、後者に従えば最新も最新、同じ年に出した作品の内容を知っていたことになる。

ただし、この「目の前にある。」という魯迅の言葉は、はたしてその作品を手にとつてという意味なのか、その作品世界に酷似した現実の光景が展開しているという意味なのか明白でない。すくなくとも、魯迅の「書帳」には、『*Le Jeu de L'Amour et de La Mort*』の名前は見あたらないからである。それならば当の論敵ないしは周辺にいる者か、新聞雑誌から仕入れた知識にちがいない。なお魯迅の「書帳」は、蔵書目録としても、ほぼ完全のものようである。川上久寿氏の『魯迅研究』にも、「前期において李大剣との交友もどれだけ思想的影響を与えられていたかもはっきりしない。ところが最近「魯迅日記」の最後にある書帳をみる事ができた。私はこれに載っていない書物もあるだろうと思つて、内山完造氏に御教示をこうしたが、これ以外にはないとのことであつた。」とでている。

魯迅の左右にあって交際ことに親密であった内山書店の故内山完造氏のことばだけに信憑性は強い。

また、この個所のロマン・ローランの引用が完全に肯定的であることにも注意しておきたい。川上氏の分類の五に相当しようか。

「花なきバラの三」はこうなっている。岩波版に採られていないから拙訳を示すと、「新聞のかたすみに、いつも青年たちのねんごろないましめ、字を書いた紙をそまつにするなよ、国学に心をとめろよ、イプセンはこうで、ロマン・ローランはあだよ、といった風なものを見かけるのである。時期と文章は別べつであるが、ふくまれている事柄はすこぶる耳なれているように思われる。ちょうどわたしは幼ないころに聞いた年寄りのお説教とおなじように。」

川上氏の分類では、四に入ろうか。イプセンの流行はずでに文学革命のころに見られたが、ここにまたロマン・ローランが登場するのは明かに徐志摩を意識している。

この時からかなりながい間、ロマン・ローランの名前は出てこない。(ただし、『集外集』の「知識階級について」を、ここに入れるべきかも知れない。)そして、『南腔北調集』所収の「連環図画弁護」(一九三二、十、二五)になつてはじめて、また再登場する。翻訳は岩波版。この文章は次のように説き起こされている。

「私自身こんな小さな経験を持っている。ある日、ある宴会の席上、私は思いついたままにこういった。映画を使って学生に教えたから、きっと教員の講義よりもよいにちがいない、将来は恐らくそうなるだろう。ところが、この言葉は、まだ終らぬうちに、ドツという哄笑の中に埋葬されてしまった。」

視聴覚教育の先駆者魯迅は、諸外国の版画家について述べたのちに、「ベルギにはマスレール (Frans Masereel) がいる。欧州大戦の時、ロマン・ローランと同様、非戦主義のために外国に逃げ出した人である。」

魯迅は武者小路実篤の非戦主義の長編戯曲、『ある青年の夢』の翻訳者である。ロマン・ローランの同様の行動に関心を持っていたとしても、別に不思議ではない。川上氏の分類では、やはり四に入ろうか。

『南腔北調集』所収「ある人の受難」序(一九三三、八、六)これは拙訳。前の例とおなじくマスレールに関連してロマン・ローラ

ンが現れてくる。「スイス滞在中は、つねに新聞紙上に絵を寄せて、社会の病根を摘発した。ロマン・ロランはかれをドレーミエとゴヤに比べている。」この文章の敘述は、比較的素直な文体である。

魯迅最後の著書である『且介亭雜文末編』の冒頭に「ケーテ・コルヴィッツ版画選集序目」(一九三六、一、二十八)が収められている。これも拙訳で引用しておく、「フランスのロマン・ロラン (Romain Rolland) はこういつている。『ケーテ・コルヴィッツの作品は、現代のドイツのもっとも偉大なる歌であって、それは貧乏人や庶民の苦しみと悲しみを照しだしている。ここには大丈夫の気概をもった婦人が、心からのこまやかな同情によって、これらを彼女の眼のなかに、慈母の腕のなかに収めているものがある。これは犠牲になった人民の沈黙の声である。』」

魯迅は、ここでも肯定的にロマン・ロランの意見を引用している。このように肯定的な引用が続くのは、やはりその人物への共感が持続している場合以外に見られない。

以上の外、『集外集』所収の「知識階級について」(一九二七、十、二十五)と題する上海労働大学における講演のなかで、やはりロマン・ロランに触れているが、これは知識階級の本質とその役割の限界のなかでの指摘である。拙訳を示すと、「イギリスのラッセル、フランスのロマン・ロランは欧州大戦に反対した。みんなはかれらを大したものだと思ったものの、その実、幸いなことにかれらの説は実行されなかった。さもなければ、ドイツはすでにイギリスとフランスに攻めこんでいただろう。ドイツがもしも同様に非戦を実行するのでなければ、どうしようもないからである。」

魯迅の知識階級論は、透徹した現実認識の上に立っている。その理想主義の側面は、中国の知識人である魯迅には、きれいな事すぎるように思われた。川上氏の分類のいくつかの方法が、この講演で従横に使用されている。

最後に一九三六年の五月八日附の曹白あての手紙を訳出しておこう。曹白は木刻家で、のちには小学校教員として過した人である。相手が多少フランス語の素養のある人だから、とくにフランス語を推奨しているかたむきもあるが、各国文学に対する短評も、わきびが利いておもしろい。

「文学を研究するのに、外国語を一つ知らないことには、たいそう不便である。日本語は名詞は中国とほぼ同じであるが、それに精通して間違いないようにしようとすれば、三、四年かけなければだめである。それにかれら自身に作家がなく、近ごろは外国の作品の紹介も少ないので、勉強するまでもない。イギリスもまた大作家に乏しく、おまけにかれらはすこぶる頑固で、あまりよその国の作品を翻訳したがない。アメリカはやゝ多いが、しかし本の値段が高い。わたしの考えでは、君はすでにフランス語を学んでいるのだから、やはりフランス語を学ぶのに越したことはない。なぜなら、第一には、復習するのは、結局のところはじめて勉強するのよりは都合がよろしい。第二には、かれらは近ごろたいへん外国のすぐれた作品を翻訳している。第三には、かれらは現在、大作家をもっている。ロラン、ジイドなどの作品は、読者にとって有益である。」

ロマン・ロランの愛読者とは必ずしもいえない魯迅も、かれを大作家として認めていたことは、これで明白である。(了)

(昭和四十一年八月三十一日)